

加藤直樹先生のご退職にあたって

國廣 敏文*

加藤直樹先生のご退職・最終記念講義にあたり、学部を代表して、先生のご経歴を中心に簡単にご紹介させていただきます。

加藤先生は1960年代に、京都大学文学部ならびに同大学の文学研究科で心理学をおさめられました。1972年に滋賀大学専任講師に着任、その後、同大学の助教授、教授として教育・研究を積み重ねられました。1988年4月に立命館大学産業社会学部教授として赴任され、産業社会学部では「人間発達論」を主な担当科目とされ、今日に至るまで18年間にわたって教鞭をとってこられました。

先生が立命館大学に赴任された80年代末、日本社会は少子高齢化社会へと急速に変貌を遂げるとともに、経済のグローバル化やそれに伴う労働環境や雇用構造の変化、環境問題の深刻化、都市化の一層の進展や情報環境・生活環境等の大きな変化が起りました。その中で、家族や子ども、障害者を取り巻く状況も変化して、新しい困難や諸問題が生まれ、悲惨な事件が相次ぎます。その意味で、家族や生活、それを取り巻く地域社会に生起する諸問題の解明と解決とは、いまや今後の日本の社会の行く末を考える上で避けて通ることのできない重要な課題となってきました。

加藤先生は、こうした時代状況と課題に対して、人間のライフサイクルを通しての発達の問題、人格あるいは主体形成の解明を通して、福祉の対象とされる人々の自立や支援のあり方を、それまでの先生の研究成果や施設での経験をもとに、一貫して提起されてきました。

そうした社会状況の変化や先生の問題関心と重なる形で、産業社会学部でも“人間化”、“文化化”の推進を合言葉に、1987年度から4コース制を導入して福祉や発達臨床分野を強化してきたわけです。1990年度からは、学部の中に「社会福祉課程」も新設され、資格の取得にも力が入られるようになります。特に本学部にとって大きな飛躍的発展の契機となりましたのは、2001年度からの「人間福祉学科」の新設です。同じ時期に新設された「応用人間科学研究科」という研究科がありますが、その設置と相まって、立命館大学の進める“人間化”の課題に、産業社会学部の教学は大きく貢献してきたわけです。加藤先生は文字通りその「牽引者」となって“人間化”の推進と新学科の設置のために粉骨砕身されてきました。2003年から2004年度の2年間は、人間福祉学科の学科長を務められ、福祉分野のまとめ役も果たされてきました。その結果、人間福祉学科は、いまや全国の福祉系の学部、学科の中でも非常に高いレベルの学生を集める学科となり、最近では、国際イン

* 立命館大学産業社会学部長

スティチュートの「国際福祉コース」を学部内に設けるなど、ますますの発展を遂げています。加藤先生は、常にこうした改革の中心となって、大きな力を発揮してられました。

学内の行政や教学の点でも、学科長をはじめとして、2005年度にはボランティアセンター長を務め、さらには、学校法人立命館の理事を5年間、評議員を8年間務められるなど、立命館学園の発展と教育・研究の推進のために大きく貢献されました。加藤先生のご活躍は学内に止まりません。1994年4月～99年3月の5年間、立命館附属の中学校・高等学校の校長を務められました。これは、先生の専門領域との関係はあるかとは思いますが、何よりも加藤先生の人格やお人柄があってこそ、これだけの長期にわたる重要な仕事を任せられたのだと確信しております。さらに社会的にも大きなネットワークをお持ちで、これまでに、「ひかり福祉会」、「びわこ学園」、「おおつ福祉会」などの社会福祉法人の理事を歴任され、福祉の現場でも先生の専門知識と経験を生かされた活動と貢献をなさっておられます。

このように加藤先生は、教育・研究・公務、社会福祉活動それぞれの面で大いに活躍をされてきました。先生は今年、定年を迎えられます。「長い間、お疲れ様でした。ごゆっくりなさってください」と申し上げたいのですが、まだまだお元気です。若々しい気持ちと活力と経験を持っておられます。今後、我々教員の“先輩”という立場で学部や立命館学園のありように大所高所からいろいろとご意見をいただくとともに、教育・研究面でもお力添えをいただきたいと思います。先生はこの4月から「立命館大学名誉教授」の肩書を背負われることになっておりますので、立命館との関係は永遠に続きます。先生の「人間発達論」の観点からすると、立命館という大学は未だ少年から青年へと成長する微妙であぶなっかしい段階にあると見えているのではないかと思います。そういう意味では、私たちといたしましては、加藤先生が取り組んでこられた諸課題をそれぞれの立場から引き受けて、今後の研究の推進と学部・大学院教育に邁進しなければならないと決意を新たにしているところですが、何分、人格形成途上の大学でもありますので、“一人前”に成長できるように、これからもご指導をお願いしたいと思います。

私的な話をして恐縮ですが、私は加藤先生の“骨太”の人間性、性格がとても好きです。大学教授といえば、いつも難しい顔をしてとっつきにくいというイメージが持たれがちですが、加藤先生はどっしりした体格をしておられて、安心して何事も信頼して任せられる“安定性”を感じさせるお人柄だと思います。信頼できる、頼りがいのある、責任感のある先生です。また、とてもユニークな先生で、よく裸足で草履（雪駄）を履いておられました。お酒が好きで、学生が好きで、語ることに、コミュニケーションが大好きな先生です。どこでお会いしても、いつもニコニコされて、誰からも好かれる、必ず一言声をかけてくださる先生です。しかし、研究や学問のことになりますと、きっちと一本筋を通され、研究者、社会的実践者としての自覚と誇りを揺るがせにしない“骨太の先生”，これが私の加藤先生像です。先生には教えていただきたいことがたくさんあります。機会があればまた一杯やりながら、先生のお考えや経験を聞かせていただき、受け継いでまいりたいと考えています。これまでの先生のご業績に敬意を表しますとともに、本学部ならびに立命館学園へのご貢献に感謝いたします。これまで18年間の長きにわたってご尽力いただき、本当にありがとうございました。これからもお元気で活躍ください。私からの挨拶とさせていただきます。